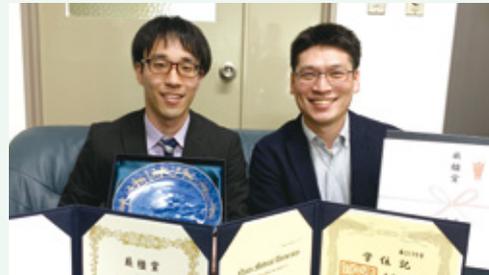


国際交流センターだより vol.3

コロナ禍により海外との交流がなくなっていますが、そんな中、明るいニュースをお届けします。海外リサーチ・クラークシップOBとして活躍を続けている坂口さんから「厳檀賞受賞」の喜びの声を、また大野助教（総合医療学）から今年1月～2月に行われた「バンラデシュでの病院支援」という貴重なお話をご紹介します。

厳檀賞受賞報告 坂口 義彦（2021年3月 医学科卒業）

この度は海外リサクラを契機に卒業まで続けてきた研究活動に対し、厳檀賞という名誉ある賞を授与頂いたことを大変光栄に思います。大学、同窓会、並びに所属研究室の多大なる支援のおかげで何んも自由な研究活動を続ける事ができました。お世話になった方々に6年間の最後にこのような賞を頂いた事を報告できた事を大変嬉しく思います。研究に興味ある後輩たちには是非、大学の数ある研究支援制度を利用して、最先端の研究に挑戦して欲しいです。



左から坂口さん、森准教授

バンラデシュ病院支援報告 “Visit Bangladesh before tourists come.”

総合医療学/総合診療科 助教 大野 史郎

この度バンラデシュにある Japan East West Medical College Hospital 病院の拡張事業へ支援に赴く機会を頂きました。主な任務は移転に伴うER診療の整備で、実診療を行いながら、機材の整備、教育システム作りを行いました。バンラデシュには公的保険制度がなく全て自費診療のため、金銭的負担を厭って検査や対症療法以外の治療を断る患者もいます。そこで今回の支援では、いかに質を落とすことなく最低限の金銭負担で診療を完結するか、といったことに尽力しました。具体的に行ったことは、ER室へのエコーの導入、多職種でのシュミュレーション教育の開始、診療マニュアルの作成、などでした。導入から2週間の間に、心不全、外傷性血胸、骨折などの診断ができ、その有用性を伝えることができました。

また現地医師に招いて頂き、農村地域の無医村の訪問、地方病院での診療、手術見学へも赴きました。その医師は首都ダッカで大学教授を務めながら、休日には出身地であるその村で無償で診療を行い、必要時は近隣の病院で自ら手術も行う、といった活動を何年も続けておられました。都会でも僻地でも、「自分の属する地域にどうにか貢献したい」、「不十分かもしれないが、常に自身にできることを追求したい」という想いが具現化されており、非常に感銘を受けました。医療資源の乏しい地で働くことで、こちらが支援にいったにも関わらず、自分が医師としてどの様に過ごすべきか、を再度考える機会を得ることができました。このような機会を与えてくださった西尾教授はじめ関係者の皆様に深く感謝します。



外傷処置の指導（中央が大野助教）

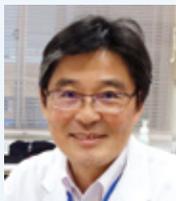


日本人支援チームと（左から3番目が大野助教）

国際交流センター長、副センター長からのメッセージ

MESSAGE

国際交流センターセンター長 嶋 緑倫（医学部長）



COVID-19は本学の教育や国際交流事業にも大きな影響を与えました。昨年の5月からTeamsを主体としたWebシステムを立ち上げ、各教室や部門の先生方の協力のもとに、遠隔授業をいち早く実施することができました。学生の皆さんにも大きな負担をかけることになりましたが、今年度は反転授業やe-learningを取り入れるなど、より参加型の授業に進化させたいと考えています。残念ながら、昨年度の国際交流事業は実施できませんでしたが、ワクチン接種も始まり明るい兆しも見えてきています。海外リサクラを含めた国際交流事業が早く再開できる日を楽しみにしています。コロナ禍での経験の蓄積は終息してからきっと役にたつと思います。逆境をチャンスに変える精神で一緒にチャレンジしていきましょう。

国際交流センター副センター長 森 英一郎（未来基礎医学准教授）



奈良医大では研究マインドの育成に力を入れております。1年生では「医学研究入門」を開講し、2年生では「リサーチ・クラークシップ（リサクラ）」の実習を行っております。2016年度からリサクラのプログラムが始まり、1期生が2021年3月に卒業していきました。卒業生の中には、リサクラ終了後も自主的に学内の研究室での研究活動を続け、学会発表や論文発表を行い、賞などを受賞するなど、活躍している方々もおられます。奈良医大では、学部学生の研究活動に対して、様々な支援体制を整えております。先輩方に続いて、最先端の研究活動に触れ、研究成果を世界に発信する学生生活を送ってみませんか。